

手品のタネはネクタイの結び目

フジキサエ

◆ FRIEND

午後から生徒会選挙が予定されていた日の昼休み、僕は満面の笑顔の幼なじみを前に、ため息をついた。

「真守（まもる）、ネクタイやって」

幼なじみの鈴人（りんと）はそう言って、ネクタイを差し出してきた。

この幼なじみのネクタイを結ぶのは、いつも僕の役目だった。

小学校は私服だったから、まだ良かった。小学校の卒業式で鈴人の一張羅のネクタイがほどけてしまい、それを直してあげたのが、運の尽きだった。

中学校の入学式にはじまり、高校に入ってから、ネクタイ着用が義務付けられている日は必ず、鈴人がネクタイを手に、僕のところへやって来た。

そして、今日の生徒会選挙ももちろんネクタイ必須の行事だった。

「真守、ネクタイやって」

笑顔を崩さず、同じセリフをくり返す鈴人に根負けをし、僕はネクタイを受け取った。

鈴人は普段ネクタイなんかせずに、第二ボタンまで全開にしている。だから、彼のシャツは襟元がたるんでいる。

それを出来るだけ手で直して、ネクタイを襟元に巻きつけた。

「このネクタイどうしたの。今朝はつけてなかったよね」

「購買で買った」

「また？ 君の部屋には何本ネクタイがあると思っているのさ」

「でも、真守。聞いてよ。何度、部屋の中を探しても見つからないんだ。不思議だよ」

「片付けないからだよ。君の部屋は汚すぎる。少しは掃除しなよ」

「えっ、真守が掃除しに来てく、」

ネクタイをキュッと締めて、ふざけた口を塞いだ。

苦しそうに襟元に人差し指を入れて、鈴人は笑った。

「ありがとう、真守。お礼にこれあげる」

鈴人がくるりと手首を返すと、その手に小さな花が現れた。

僕らを遠巻きに見ていた女子が、わあ、と声を上げた。

手品だ。

鈴人は、昔から手品が得意だった。部活もマジック同好会に入っている。

「相変わらず器用だね」

「だろ」

「それくらい器用ならネクタイだって結べるだろうに」

「いいじゃん、幼なじみなんだし」

鈴人は笑んで、ネクタイの結び目をトントンと指で叩いた。

僕は小さくため息をついた。

そんな僕らにクラス委員の七生（ななお）が声をかけてきた。

「毎回毎回派手だね、お前ら」

「うらやましいっしょ？」

鈴人はおどけて、ブイサインをする。

七生は肩をすくめて、時計を指した。

「ラブラブなのは結構だが、そろそろ生徒会選挙が始まるんだが」

「やべ。真守、早く体育館いこ」

僕のジャケットの胸ポケットに花を挿して、鈴人は軽やかに身をひるがえした。

「……」

「真守、どうした？」

花を見つめたまま動かない僕を、七生が振り返った。

「ううん。なんでもない」

胸ポケットの花を奥底に押し込んで。

僕も鈴人の後を追いかけるようにして、教室を出た。

◆ VIDEO SHOP

僕の日課は、予備校の帰りに駅前のレンタルビデオ屋に寄ることだった。

店に入ると、カウンターの中で暇そうにしていた鈴人がパッと笑顔になった。

「いらっしゃい、真守」

鈴人がここでアルバイトを始めたのは、今の高校に入学が決まったすぐのことだった。

もう一年半になる。

鈴人の家は母ひとり子ひとりだ。父親は鈴人が五歳の時に亡くなった。母親は児童養護施設のスタッフをしながら、鈴人を育て上げた。

鈴人は遊ぶ金くらいは自分で稼ぐと言って、平日の放課後は毎日シフトを入れていた。

僕の予備校の終わる時間と鈴人のアルバイトの終わる時間がちょうど合うので、毎日一緒に帰っていた。

今日は早めに授業が終わってしまったので、まだ鈴人のシフトが終わるまで時間がある。

洋画コーナーでなんとなく棚を眺めて時間をつぶしていたら、鈴人が返却用のカートを押してきた。

僕の隣に並んで、鈴人はDVDをもとに戻しながら、「洋画ならこれがオススメ」とDVDを渡してきた。

「何これ、」

「金髪巨乳拘束マニア。超オススメ。真守んちで見よ」

「ひとりで見れば」

「えっ、俺がシテンの見るの？ 超恥ずか、」

ふざけたセリフをすべて言う前に、DVDを鈴人の顔に押し付けた。

そのまま立ち去ろうとしたら、鈴人は「ウソウソウソ！ ホントはこれ！」とDVDを一本、棚から取って、差し出した。

ちらりとパッケージを見ると、『ウッディランド』と書かれていた。

「これは……？」

「来週、この続編が公開されんじゃん。一緒に見に行こうよ」

さらりと誘われて、一瞬言葉を見失った。

ふたりで遊ぶなんて、いつ振りだろう。

思い出せないくらい前のことだった。

「考えとく」

「これ全部戻したら、あがりだから、もうちょっと待ってて」

ガラガラとカートを押して、鈴人は別の棚へ行った。

僕は結局そのDVDをカウンターまで持って行ってしまった。

◆ MEMORY

鈴人と最初に出会ったのは、五歳の冬だった。

総合病院の屋上でのことだった。

事情があって、入院していた僕は、夕食中に看護師さんの目を盗んで、一人で屋上に来ていた

。

病院の生活の中で、食事の時間が一番嫌いだった。

他の子のベッドには付き添いの親がいるにもかかわらず、僕だけが一人だったから。

はしゃぐ他の子たちの声を聞きながら、一人で食事を摂る日々。

いつも、いつも、僕のベッドの周りだけ静かだった。

ついに嫌気がさして、僕は病室を抜け出した。

夜の屋上は風が強く、あっという間に体温が奪われた。

かじかむ手でフェンスを掴む。

夜の闇に、駅前の明かりがぼつぼつと浮かんでいた。

ふと言葉が口からこぼれる。

「おかあさん……」

と、抑えていたものが一気にこみ上げてきた。

しゃくりあげながら、ひたすらに母親を呼んでいた。

どれくらいそうしていただろうか。

突然、背後で屋上のドアの音がした。

振り返ると、小さな人影が立っていた。

非常灯のおかげで、なんとなく年の近い子供だと分かった。

その人影が駆け寄ってきた。

傍に来ると、輪郭がはっきりした。男の子だ。でも、入院患者ではない。パジャマを着ていない。ジャンパーにTシャツ、ジーパンという姿だった。

「寒くないの？」

僕はじっと男の子の顔を見つめたあとに、首を横に振った。

「寒くないの？」

頷く。

そして、僕はフェンスの向こう側へ目を戻した。

「病室に戻らないの？」

もう一度、頷く。

「母ちゃん探してんじゃね？」

首を横に振る。

そっか、と男の子が呟いた。

男の子は僕の横に立って、同じように夜景を眺めた。

大きな風が吹いた。

男の子は寒そうに肩を寄せ、僕はくしゃみをした。

「ほら、やっぱ中入ろうぜ」

「ヤダ」

ぶるぶると震えてくる体を手で押さえて、僕は首を振った。

男の子は呆れた顔をした。

「なんで」

「ママが来るまで戻らない」

「なんだ、母ちゃん、いるんじゃない。じゃあ、絶対探してるって」

「探してない。絶対」

「なんでだよ。絶対探してるって」

「ママいないもん、真守置いてったんだもん、来ないもん、いないんだもん」

止まっていた涙がまた溢れ出してきて、僕は声をあげて、泣いた。

男の子は泣きだした僕を見て、びっくりした顔をした。

当然だ。見ず知らずの子供が、突然わけのわからない癩癩を起こして、泣きだしたのだ。

男の子は、あっ、と呟くと、忙しくジャンパーやズボンのポケットを叩きだした。そして、ポケットから何かを取り出すと、僕の前にずいっと手を出した。

「見て」

その手には小さな花があった。

花びらは布でできていて、茎はプラスチックのおもちゃの花だった。

「この花の色は赤ですが、この魔法のハンカチをかけると……」

ジーパンのポケットからくしゃくしゃのハンカチを取り出して、花にかぶせた。

魔法のハンカチとは言っているが、アニメのキャラクターがプリントされた子供用のハンカチだった。

「ワン、ツー、スリー……なんと！ 花の色が白くなっています！」

ハンカチを取った花は、色が変わっていた。

僕はきょとんとして、花を見つめた。

「……なんで」

「僕がマジシャンだからです」

えへん、と男の子が胸を張った。

当時、マジシャンという言葉を知らなかった僕は、もう一度きょとんとした。

「泣きやんだな」

ほっとしたように男の子が笑った。

僕も不思議と気持ちが落ち着いていた。

「戻ろうぜ、病室」

男の子が差し出した手を、僕は素直な気持ちで握った。

僕の手は芯まで冷え切っていたし、男の子の手も冷たかったが、握っている間にどちらもあたたかくなっていった。

あたたかな手に引かれながら、僕は屋上へ続く階段を降りて行った。

「オレ、鈴人。お前は」

「真守」

「真守は何階にいんの」

「2階」

「オレの父ちゃんは5階にいるんだ。父ちゃんは手品がすごくうまいんだ。今度見せてやるよ」

「うん」

「オレそろそろ帰らなきゃなんだ。でも、明日も来るから。そしたら、またあそこで会おうぜ」

「うん」

これが、僕と鈴人の出会い。

そして、このわずかな時間で、僕は鈴人をどうしようもなく好きになってしまったのだった。

鈴人と映画を見に行こうと約束した日から一週間が過ぎた。

明日には続編が封切りになるが、鈴人からは何も言ってこなかった。

けれど、僕は特に気にしなかった。

鈴人のことだから、真夜中に突然電話をかけてきて、「明日どうしようか」と言ってきたり、明日の朝に突然家にやってきて「映画見に行こう」と言うのだろう。

鈴人は一度口にした約束は絶対に守るが、自分中心に物事を進めるキライがある。

そのせいで何度となく振り回された経験があった。

今回もそうなるだろうと僕は予想していた。

五限の理科が終わり、実験の片付けを手伝っていたら、ホームルームの時間になっていた。

早足で教室に戻ったが、もうホームルームは終わっていた。

部活組の姿はもうなく、帰宅部の面々が放課後の遊び先を相談していた。

鈴人も教室の真ん中で、友達に囲まれている。

今日の鈴人はネクタイをせず、ワイシャツを第二ボタンまで開けているといういつもの格好だった。

そんな鈴人を横目に見ながら、帰り支度をしていると、七生が声をかけてきた。

「お片付け、お疲れ様。真守は本当に律儀だなあ」

「先生が声をかけてきたとき、僕の横にいたよね。七生」

「そうだったかな」

うそぶいて笑いながら、七生はメモを差し出した。

「月曜日の連絡事項。体育はマラソンだって。ウンザリだね」

メモに目を通してしていると、ジャケットのポケットの中でケータイが震えた。

メールの受信だった。

「何？ メール？ 彼氏？」

ふざける七生に、僕はケータイの画面を見せた。

「レンタルショップから。返却日のお知らせメール」

「なに借りたの？」

「ウッディランド」

へえ、と七生が声を上げた。

「真守もファンタジーって見るんだ？ なんか意外」

確かにそれは僕も思った。

鈴人が薦めてきたから、てっきりアクション物だと思っていた。テレビでCMを流していた記憶はあったのだが、内容まで把握していなかった。

ウッディランドは、鳥の国へ飛ばされた少女がいろいろな鳥と関わりながら、元の世界へ戻る方法を探る……というストーリーだった。鳥と関わるたびに少女が人間的に成長していくので、児童文学的なファンタジーなのだろう。

「鈴人がさ、」

と言ったところで、突然、背後で歓声が上がった。

振り返ると、女子が目を丸くして、手にしたトランプを見ていた。すぐにその女子は自分のポケットを丹念に調べ、もう一度歓声を上げた。

鈴人の手品だ。

トランプの山から観客に一枚カードを選んでもらい、もとに戻して、シャッフルすると、いつの間にかその選んだカードが観客のポケットに入っているというもの。

当の女子も、周りにいた友達も、口々にすごいと言っている。

鈴人は器用にトランプをシャッフルしながら、「そのカードあげるよ」と言った。

「いいの？」

「記念だもん」

ニコッと鈴人が笑む。

女子の笑顔がぱっと色めきたった。

あ、あの子おちたな、と思った。

マジック同好会というだけで「やってみせて」と言われるし、鈴人も断らないから、あちこちでああいう状況になる。そして、その度に鈴人は他人の心をさらっていく。

あれを意識的にやっているのならまだしも、鈴人は無意識だ。余計にたちが悪い。

そんなことをやっているから、鈴人は同学年はもとより、上級生にも下級生にも人気があった

。

「……かない？ 真守」

鈴人に気を取られて、七生の言葉を聞いていなかった。

あわてて向き直ると、七生が苦笑した。

「その映画、一緒に見に行かない？」

「僕と？」

「そう。俺も1見たんだよ。続きがすごい気になるの。明日、予定ある？」

「いや……今は、まだ……」

嘘ではない。

ただ、予定が入る『予定』がある。

ちらりと鈴人をうかがうと、先ほどの女子と仲良さそうにしゃべっていた。

きっと鈴人なら誘う相手はたくさんいるだろう。

それなら。

「いいよ。一緒に見に行こう、七生」

「やったね。じゃあ、明日どこで待ち合わせようか」

「なにになに？ どっか行くの？」

突然、鈴人が割って入ってきた。

いつの間に。

さっきまで向こうで女子と話していたのに。

驚いている僕をよそに、七生が答えた。

「映画。ウッディランド2見に行こうって言ってたんだ。鈴人も行く？」

「行く行く！ ていうか、みんなで行こうぜ！」

たちまち女子から黄色い声上がる。

「私たちもいいの？」

「もちろん！」

「嬉しい！ 明日、部活休みだったの！」

「どこの映画館行く？ せっかくだから、みなとみらいの映画館に行こうよ」

「いいねえ。じゃあ、桜木町の駅前で待ち合わせて……」

目の前でとんとん拍子に話が決まっていく。

鈴人の周りではしゃいでいる女子を見ていると、目まいがしてきた。

気付いたら、「ごめん！」と叫んでいた。

「ごめん！ 僕、予備校の模試があったんだ！ みんなで行ってきて！」

鈴人が口を開くより先に、カバンを掴んで、教室を走り出た。

転がるように階段を駆け下り、学校を出た。

駅に着くまで、一度も立ち止まらなかった。

改札を入った途端、がくんと膝の下から力が抜けた。

僕は壁にすがりつくようにして、しゃがみ込む。

上がった呼吸はすぐには戻らず、肩で息をする。早鐘を打っている心臓がうるさい。

目を閉じると、白い光が明滅した。

その光の合間に、先ほどの女子の姿がよぎった。

ミニスカートから伸びる太もも。

丸みを帯びた声。

細い指先。

丁寧に手入れのされた爪。

輝くような笑顔。

どれもこれも僕にはないものばかり。

彼女たちがうらやましい。自然にふるまって、鈴人に好かれることができる。

ふと、彼女たちと同じことをやっている自分を想像して、吐き気がした。

「……きもちわるい……」

と呟いて、僕は口を拭った。

次の日、僕は予備校の自習室へ行った。

模試があると嘘をついた手前、予備校以外の場所に居るのが、後ろめたかった。

夕方になって、予備校を出た。

何気なく空を見上げると、夕焼け空のはしに青空の名残があった。

きっと今日は一日中良い天気だったのだろう。

今頃、映画に行ったメンバーは楽しい週末を過ごしているのだろうと想像しながら、目を落とすとそこに鈴人がいた。

駐輪場の前で退屈そうにしゃがみこんでいる。

一瞬、錯覚かと思ったが、僕を見つけてパッと笑顔になったのは確かに鈴人の顔だった。

「おつかれ、真守」

「何してるの、こんなところで」

「真守を迎えに来たに決まってんじゃない」

「映画は、」

「やめたよ」

「やめた？」

「だって真守いなきゃ意味ないもん」

そう言って、鈴人は笑んだ。人の心を無意識にさらっていく、あの笑顔で。

思わず、叫んでいた。

「バカ！」

「ええっ、なんで！ 感動するところじゃないの？」

「バカだからバカだって言ってるんだ。本当に君は大馬鹿者だ！」

言い捨て、僕は足早に歩き出した。

胸の奥が締め付けられるように痛み、無性に泣きたくなった。

背後から鈴人の慌てる声が聞こえたが、構わず歩き続けた。

少しして自転車の車輪の音と、鈴人の声が追いかけてきた。

「真守ー。まーもーるー。機嫌直してよー」

黙々と歩き続けていると、隣に鈴人の自転車が並んだ。

他のクラスの男友達はマウンテンバイクか単車に乗っている中、鈴人は普通の自転車を使っていた。前にカゴがついている、いわゆるママチャリというやつだ。

鈴人の自転車のカゴには大きく膨らんだスーパーの袋が入っていた。袋の口からニラの葉がのぞいていた。

僕が口を開くより先に、鈴人が答えた。

「今日は俺が夕飯担当なの。久しぶりに餃子やろうかなって思って。食べに来る？ 今日、圭さんは？」

「圭兄は今日も仕事だよ。遅くなるって言ってた」

僕は今、兄と二人暮らしをしている。

兄は十七も年上で、兄弟というより親代わりに近い。

事情があり、親の生計に頼れない僕は、学費から生活費まですべて兄に出してもらっていた。

その代わりに、掃除、洗濯、食事などの家事はすべて僕の担当だった。

そして、これは僕が自分自身に定めたルールなのだが、どんなに遅くても夕飯だけは兄と一緒に食べようと決めていた。兄は帰りが遅くなる時は先に食べていいと言ってくれているのだが、それだけは呑めなかった。

鈴人もそのルールを知っている。

だから、夕飯の招待を強要することはせず、「餃子をたくさん作るからあとで真守の家へ持っていく」と言った。

鈴人の申し出はとても有り難かったので、僕は素直に頷いた。

「あ、」

と突然、鈴人が声をあげた。

「さっきスーパーでなつかしいもの見つけたんだ」

鈴人は片手で器用にハンドルをあやつりながら、もう片方の手でスーパーの袋をあさった。すぐに目当てのものを見つけて、投げて寄越した。それは小さなサイコロが三個ビニール包装されたものだった。

「サイコロキャラメル。真守、好きだったろ」

紅白のサイコロのパッケージは、確かに幼いころに見たものと変わりなかった。僕は夏祭りのくじ引きの景品でこのお菓子が一番好きだった。サイコロ一個の中にキャラメルがふた粒入っているので、兄にお土産としてひと粒持って帰れるのが魅力だった。

「これって普通に売ってるものだったんだ」

「な。俺も知らなかった。三個セットってのがセコいけどな。どうせなら祭りのときみたいにバラで売ってくれれば良いのに」

「これ、くれるの」

「もちろん」

ありがとう、とカバンにしまおうとしたら、鈴人が、食べないの、と言ってきた。

「食べたいの？」

「腹減った」

「はいはい」

ビニール包装を剥いで、サイコロを一個あける。

キャラメルをひと粒自分の口に放り込み、もうひと粒を鈴人に差し出した。

てっきり手を出してくると思っていたのだが、鈴人は顔を出してきた。

あ、と手を引く前より先に、キャラメルは鈴人の舌と歯に持っていかれた。

嬉しそうな鈴人の顔に、やられたと思った。

平静を装って、残りのサイコロをカバンに押し込んだ。

さりげなく指先をぬぐったが、鈴人の舌の感触は消えなかった。

それから、家に着くまで鈴人と何度か言葉を交わしたが、何と答えたか全く覚えていなかった。

その夜、夢を見た。

僕は腰まで沼につかっていた。

一足進むたびにズブズブと沈んでいく。

沼からあがろうと足を動かすが、足の裏はやわらかい泥をかいただけだった。

息があがって、胸が苦しい。

泥をかき進むたびに、なぜか鈴人の舌の感触を思い出していた。

沼の表面があごの下まで来たと思ったら、すぐに口元まであがってきた。

鼻まで泥につかり、ついに頭のとっぺんまで沈んでしまった。

腕で泥をかき、なんとか水面に顔を出そうとあがく。

酸素が足りなくなり、もうダメだと思った瞬間、目が覚めた。

自分のベッドの上だった。

心臓が早鐘を打っていた。

ためていた息を吐く。

カーテン越しに白々とした朝の光が差していた。

枕もとに置いてある携帯電話を手探りで見つけ、フラップを開く。

まだ五時前だった。

もう一度、息をつき、目を閉じた。

部屋の空気はひどく背徳のにおいがした。

◆ BROTHER

浮かない気分でリビングに行くと、兄がいた。

日曜日だというのにスーツ姿だった。

愛用の黒縁めがねをかけていた。ダサイから新しいものを買いなよ、と言っても、兄は構わずその眼鏡を使い続けていた。

「仕事？」

「うん。月曜日がリリースなんだけど、まだ色々残ってて」

「朝ご飯は、」

「餃子食べた」

昨夜、鈴人が持ってきてくれたものだ。

ニラがたくさん入っていたのに、と眉をひそめると、兄は苦笑いした。

「今日は女子社員はいないからいいんだよ」

兄は今年34になるが、女っ気がない。

むしろ、今までずっと兄の傍に女性の影を見たことがなかった。

単に隠すのが上手なだけなら良いが、本当に女性との付き合いがなかったとしたら、原因はひとつ。僕の存在だ。

「行ってくる」

僕の頭を撫でて、兄は出て行った。

僕は一人リビングに残された。

◆ BRUE MONDAY

月曜日の朝は朝会がある。

もちろん、ネクタイ着用が必須のため、僕は朝から鈴人に追いかけられた。

校庭に並んで、校長の話聞き流す。

今日は曇り空で良かった、と僕はこっそり息をついた。晴天の日の朝会ほど苦痛なものはない

。ちらりとクラスの列に目を走らせると、七生の姿がなかった。またか、と僕はひとりごちた。退屈な校長の話から解放され、そろそろ教室に戻る途中、校門の前に見知った車がとまった。真っ赤なコンパクトカー。

ミニトマトのようなころんとしたフォルム。

僕は教室に戻る人波から外れ、車に駆け寄った。

車内から七生が降りてきた。

運転席の人物と一言二言声を交わして、七生は車から離れた。

すぐにコンパクトカーは走り去り、七生が残された。

「七生」

声をかけると、七生は僕に気づき、微笑んだ。

僕は肩をすくめて、口を開いた。

「また寝坊かい、」

「俺の目覚ましは八時半にセットされてるんだよ」

ゆっくりとした足取りで歩きながら、七生はうそぶいた。

朝礼は八時半ジャストに始まる。間に合うはずがない。もとより、間に合わせる気がないのだ

。「義姉さんも律儀だね」

僕の言葉に、七生は曖昧に微笑んで、昇降口へ足を向けた。僕もその背を追いかける。

七生の家は現在、両親と、五歳離れた兄と、兄の妻が同居している。

七生が遅刻だとあわてると、両親の代わりに兄の妻が送迎してくれるのだ。

僕は七生の隣に並んで、口を開いた。

「義姉さん、元気？」

「変わらないよ。そそっかしくて、目が離せない」

七生はいつくしむように笑みを深めた。

「この前は庭の水まきしてる最中に蛇口からホースが抜けちゃったみたいで、悲鳴上げてた」

本当に仕方ないよね、と七生はどこか遠くを見るような目をした。

ああ、これが叶わない恋をしている者の目か、と僕は思った。

身近にいるはずなのに、手の届かない彼方にいる人を見るような。

僕も鈴人の傍にいるときは、同じ目をしているのだろうか。

七生と僕は気が合い、よくつるんでいるが、結局のところ、同じ穴のムジナなのだ。

望みのない思いを胸のうちに孕んでいる者同士。

叶わないと知りつつも、恋い焦がれ、わずかでも傍にいようとする。目が合うだけで心が跳ね、言葉を交わすだけで幸せになれる。

そんなどうしようもない思いを、ふたりして持て余している。

「真守、今日も予備校？」

「もちろん。五時からだけどね」

「じゃあ映画観に行かない？ 今日四限までだから、午後丸々ヒマなんだよね」

家に帰れば、義姉とふたりっきりになれるだろうに。

言いかけた言葉を、僕は飲み込んだ。

叶わない相手とは、一定の距離を保つことが最善の方策だと七生は知っているのだ。

そして、七生は義姉さんにより近く、けれど何も起こらない安全な距離を熟知している。

義姉との間だけでなく、七生は他人との距離を測るのも得意だ。

つかず離れず。

相手が一番心地よいと思える距離を、常に保っている。

会話をしているも、ある一線よりは踏みこんでこない。

その安心感がとても心地よかった。

そんな七生と過ごす時間は惜しかったが、僕はごめんと断った。

「放課後は鈴人に付き合うことになってるんだ」

さっきネクタイをやっている最中に、鈴人から午後はあけておいてと言われたのだった。

放課後と聞いて、七生の顔が変わった。

「へえ、今日はどこ？」

「屋上」

「定番だね」

七生はにやっと笑って、いってらっしゃいと言った。

僕は肩をすくめるしかなかった。

鈴人に放課後付き合うことは、週に1、2回ある。

やることは立ち会いだ。

とは言っても僕は物陰に隠れているだけなのだが。

僕は放課後、鈴人に連れられて屋上に来ると、ひとりで塔屋の陰に隠れた。

鈴人は入口の近くにいるはずだ。

塔屋のドアが開く音がした。誰かやってきた。

「鈴人、クン……」

緊張した女生徒の声が聞こえる。

こちらからは見えないが、鈴人は曖昧な笑顔を返したに違いない。

女生徒が鈴人を前に、しどろもどろになりながら、告白をしはじめた。

鈴人は黙って聞いている。

こういうことは、最近増えてきた。

最初、鈴人に告白現場に立ち会ってくれと言われたとき、単純に緊張しているだけかと思っていた。

女子も告白するとき、何人もの友人を連れて来る場合がある。

それと同じで、落ち着くために、幼なじみの僕が必要なのだと思っていた。

そして、立ち会いは初めだけで、いつかは鈴人がひとりで呼び出しに応じるのだとも思い、簡単な気持ちでオーケーした。

けれど、どんなに回を重ねていっても、僕の立ち会いは続いていた。

「……付き合ってくれないかな」

気がつくのと、いつの間にか話が進んでいた。

耳を澄ますと、ちょうど鈴人がお決まりのセリフを言うところだった。

「ごめん。俺、好きな奴いるから」

これで大体の女子はあきらめる。

粘り強い子だと、「どんな人ですか」とか聞いてくるが、鈴人はのらりくらりとかわして、結局答えないまま相手をあきらめさせる。

今日の子は気が強そうだから、長引くかも知れない。

腕時計に目を落とすと、まだ1時を回ったところだった。

長くなっても1時半には終わるだろう。

これが終わったあと、予備校の時間までどうしようかと意識を他の所に向けていたら、女生徒から衝撃的な言葉が飛び出した。

「それって馬場真守のこと？」

心臓が止まるかと思った。

自分の名前が出てくるなんて、予想もしていなかった。

今まで一度だって、僕の名前を出す女生徒はいなかった。

いくら仲が良くても、僕らは幼なじみだ、ということが周知の事実だと信じていた。

僕と鈴人の間にそんな感情を想像するなんて、有り得ないと思っていた。

もっと鈴人と距離をおくべきだったろうか。ネクタイをやってあげるのは、やり過ぎだったのだろうか。この前、数学の宿題を見せてあげたのがいけなかったのかも知れない。

次から次へと不安要素が思いついてしまう。

僕はシャツの左胸をぎゅっと握りしめた。

「えーと、」

困ったような鈴人の声が聞こえる。

否定をして欲しい。

どんな疑いもかけられないくらい完膚なきまでに否定をして欲しいと祈った。

例えば、僕がどんな思いを抱いていたとしても、鈴人はそんな思いは欠片も抱いていないのだと

そこにいる女生徒に向かって、言いきって欲しかった。

けれど。

「そうだよ」

信じられない言葉が、耳を打った。

「俺は真守のことが好きなんだ」

頭を殴られたような衝撃があった。

呆然とした僕の耳に、女生徒の震えた声が届いた。

「なんであんな暗い子……教室でもいつも一人で……浮いているし……友達いないじゃない」

「俺がいるし、七生もいる。友達なんて二人もいれば充分だろ」

というか真守には俺一人がいればいいんだけどね、という鈴人の言葉が、女生徒の逆鱗に触れたらしい。

突然、女生徒がヒステリックに叫んだ。

「女のくせに『僕』とか言ってるのよ？ 気持ち悪くないの？ あんな子！」

ビクリと体が震えた。

純粋な悪意に満ちた言葉が胸から入り込んで、僕の体を侵食していく。

背中を嫌な汗が伝い、僕はしゃがみ込んだ。

目の前で制服のスカートのプリーツが揺れる。

僕は女だ。

産まれたときから性別は女だ。

女で、鈴人の幼なじみだ。

激しくドアが閉まった音で、僕は我に返った。

女生徒が立ち去ったらしい。

深く息をつく。

と。

「真守」

心臓が、跳ねた。

一気に心拍数が上がった。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

どうすれば三十分前の状態に戻れるだろうか。

何も知らなかった、曖昧だった、あの状態に。

「真守」

大好きな鈴人の声。

いつもなら泣けるくらい嬉しいのに。

今は呼んで欲しくない。

「真守、さっきのことだけど、俺は、」

「僕は！」

隠れたまま、僕は叫んだ。

「『僕』は鈴人の友達だ。ずっと。これからも変わらない」

ずっと。

今までそうしてきたように。

友達で、幼なじみで、平行線。

この距離を保っていたい。

ためらうような気配の後、鈴人がしゃべった。

「俺は」

ぎゅっとスカートの端を握りしめて、次の言葉を待つ。

お願いだから。

今の関係を壊すようなことは言わないで欲しい。

けれど、その願いは届かなかった。

「俺は、真守のことが、好きだ」

脱力感が僕を襲った。

分かり合えない。

僕の望んだ関係にはもう戻れない。

僕はよろよろと立ち上がると、物陰から出た。

すぐそこに鈴人がいた。

ひどく緊張した顔をしている。

たぶん、僕も同じような顔をしているのだろう。

「ごめん」

僕は頭を下げると、顔を伏せたまま塔屋の入り口まで走った。

そのまま、後ろを振り返らずに階段を駆け降りる。

鈴人がどんな顔をしているのか、見るのが怖かった。

◆ CONFLICT

ひたすら走って、家までたどり着いた。

ドアを閉じた途端、吐き気がこみ上げてきて、そのまま洗面所へ直行した。

上手く吐けず、粘り気のある唾液を流しただけだった。

洗面台の鏡に僕の顔が映る。

短い髪の毛。

丸みを帯びた顔。

小さな目鼻。

猿の子供によく似てる。性別が判別しにくい形だ。

背もそんなに大きくない。春の健康診断で、147センチだった。小学生のころから伸びていない。がりがりで痩せっぽっち。女性らしい体形はしていない。Tシャツにジーパンという格好をすれば、みんな男と間違える。

一瞬、鏡に映った顔に、大人の女性の顔がだぶって見えた。

赤い口紅と茶色の巻き髪が印象的な女性。

僕は思わず鏡を殴っていた。

「違う！僕はあんな女とは違う！」

あんな女とは呼べても、ママとは言えなかった。

自分のことを置いて行ったあの人を、母親とは呼べなかった。

私が産まれたとき、父親という存在はなかった。

母親と、十七歳になる圭兄がいた。

圭兄は大学に入学すると同時に家を出たから、私はしばらく母親と二人暮らしだった。

私が五歳になったとき、母親がいなくなった。

奇しくも、圭兄が大学の夏休みで帰省し、脱水症状を起こして倒れている私を発見した。

症状自体は重くはなかったが、虐待の疑いありということで、入院という形で保護された。

その際に、私は鈴人と出会った。

しばらくして、私は児童養護施設に行くことが決まった。母親の両親はすでに亡くなっており、親戚と呼べる人はいなかった。唯一の血縁である圭兄も、まだ大学四年生で、私を育てることができなかった。

私が引き取られた児童養護施設では、鈴人の母親が職員として働いていた。

鈴人の母親はとても良い人だった。あたたかくて、やさしくて、傍にいとホッとする空気を持っていた。自然と私は彼女になついた。

鈴人は父親が入院していたため、母親が働いている間は、施設の敷地内にいた。

私たちは毎日一緒に遊んだ。晴れた日は外で追いかけっこやサッカーをし、雨の日は施設の中で鈴人のマジックを見た。

鈴人と鈴人の母親のおかげで、私は寂しい思いをしなかった。

夏、秋、冬と過ごし、春になると、私は小学校に入学した。

鈴人も同じ小学校だった。

今まで以上に、鈴人と一緒に過ごす時間が多くなった。

それから少しして、圭兄が私を引き取りたいと言ってきた。春に圭兄は就職しており、ようやく生活も安定し、私の面倒をみる余裕ができるようになったそうだ。

私は施設を出ることになったが、生活はあまり変わらなかった。兄と暮らす家が施設の近所で、小学校を転校せずに済んだからだ。

学校では相変わらず鈴人と共に過ごし、放課後は鈴人が施設に行くならついて行き、鈴人の母親が休みのときは鈴人の家にお邪魔した。

圭兄がいて、鈴人の母親がいて、鈴人がいる。

父親代わりがいて、母親代わりがいて、親友がいる。

幸せだった。

実の母親に棄てられたことなど、気にも留めていなかった。

一度だけ、たった一度だけ、実の母親について圭兄に聞いたことがあった。

それは学校で両親について調べてくるとい宿題を出されたときのことだった。小学校の二、三年生のときだったように思う。

父親については圭兄のことを書くつもりだったし、母親については鈴人の母親について書くつもりだった。リビングで宿題をやっていたら、圭兄が覗き込んで来たので、詳細を話した。圭兄は一瞬複雑そうな顔をしたが、すぐに笑顔に戻った。

そのとき、ふと私の頭に浮かんだことは、単なる思いつきだった。何の深い意味もない、ただの思いつき。それを、口にしてしまった。

ただ一言、「私の本当のお母さんってどんな人だったの」と。

圭兄がひどく怖い顔になったのを今でも覚えている。すぐに私も言うてはいけなかったことなのだ気付いた。けれど、一度口にしてしまったことは取り返しがつかなかった。

どうしようどうしようと悩んでいる私に、圭兄は一枚の写真を見せてくれた。

その写真には、小さな男の子と大人の女性が映っていた。

男の子は幼いころの圭兄だと分かった。大人の女性は見たことがなかった。赤い口紅と茶色の巻き髪が印象的な女性だった。

「それが母さんだよ」

苦しそうに圭兄が言った。

まるで悪いことを告白しているような重い口調だった。

「いつも男の話ばかりで……男のことしか考えてなくて……子供のことは目に入っていない……そんな人……」

言葉を一つ一つ選びながら、圭兄が言う。

写真の中の女性は派手には見えなかった。けれど、鈴人の母親のような、他人を安心させる雰囲気も持っていなかった。自分とこの女性に血の繋がりがあるとはどうしても思えなかった。街中ですれ違っても、気付かずに通り過ぎるだろう。

「真守はそんな人間になっちゃダメだよ」

ぼつりと圭兄が呟いた。

かすかな、消えそうな声だった。

私に聞かせるために言ったのではなかったのかも知れない。

圭兄のひとり言だったのかも知れない。

けれど、その言葉は私の耳に届き、私の脳に沁みていった。

圭兄と実の母親の話をしたのは、それっきりだった。

それから数年は、実の母親の存在を意識することなく過ごした。

きっと、あのことがなければ、ずっと気にせずに暮らしてこれたのだろう。

小学六年生の冬、同じクラスの女子に呼び出され、廊下の端っこに連れて行かれた。そこには四、五人の女子がいた。この面々は周囲となじむことを拒み、特定のメンバーとだけ固まっているような子たちだった。この子たちは髪型を毎日変えてきたり、色鮮やかな服を着てきたりと、何かと目立つことを好んだ。そして、特に顕著だったのが、男子と敵対していたことだ。

私は鈴人と仲が良かったせいもあり、男子と女子どちらとも仲が良かったのだが、この面々は男子をまるで汚いもののように忌避した。当然、男子の方もこの面々を嫌った。私からしてみれば何を考えているか分からない集団だった。

その中の一人が、私に訊いてきた。

「鈴人くんって好きな子いるのかな」

ああ、と思った。

なるほど、とも。

「この子、中学は私立行くから、鈴人くんとバラバラになっちゃうんだよね」

「だから、ねえ」

「分かるでしょ」

周りにいた子が、応援するように口添えする。

好きな異性の話など、鈴人としたことがなかったから、私は悩んだ。

私が腕を組んで、考え込んでいる間、目の前にいる面々はこそこそと楽しそうに囁きだした。

「大丈夫だよ」

「きっとオッケーだって」

「そうかな」

鈴人に好きな子がいるのかと訊いてきた子をぼんやりと眺める。

紅潮した頬に、艶っぽい笑顔。

どこかでこんな表情を見たことがあった。

誰だったか思いだそうとして、その子をじっと見た。

その子の髪は茶色くて、ゆるくウェーブがかっていた。

茶色の巻き髪、笑顔ときて、ようやく母親の顔を思い出した。

「鈴人くん、この髪型好きかなあ」

「可愛いよ、大丈夫」

「この服は？」

「可愛いって！ 鈴人くんも好きだって！ 絶対！」

いつかの圭兄の言葉が、頭をよぎった。

『いつも男の話ばかりで……』

『男のことしか考えてなくて……』

その途端、ざわりとした嫌悪感が背中を這った。

自分を棄てた母親と同じ生き物が、目の前にいる。

女という醜い生き物が。

私の答えを待ち切れなかったのだろう。

女子の一人が、私に手を伸ばしてきた。

「ねえ、どうなの？ 鈴人くんは好きな子いるの？」

女子の手が、私の腕を掴む。

掴まれた個所から、何かが私の体を侵していく気がした。

咄嗟にその手を振り払っていた。

「知らない！ 私は何も知らない！」

ポカンとしている女子を放って、私は走り去った。

手洗い場へ行って、さきほど掴まれた個所をゴシゴシと洗った。

どんなに洗っても、侵された部分が綺麗にならない。

皮膚が赤くなって、血が出てくる。

もっと擦ろうとして、誰かに手を掴まれた。

「真守！ 何やってんだよ！」

鈴人だった。

「どうしたんだよ。腕、赤くなってんじゃん」

鈴人は蛇口を閉めて、私の腕を拭いた。

私はただ鈴人のすることをぼんやりと眺めていた。

「あ、さっき佐々たちと一緒にだったみたいだけど、なんかやられたのか？ 真守？」

佐々というのは、鈴人に好きな子がいるか聞いてきた子だった。

ゆるいウェーブがかっている茶色い髪が特徴的なあの子。

もしあの子が告白して、鈴人がオッケーしたら、どうなるのだろうか。

学校にいる間も、放課後も、もう鈴人とは一緒にいられないのだろうか。

胸の奥が締め付けられる。

知らずに私は泣き出していた。

鈴人が驚いた顔をしている。当然だ。理由も言わずに、突然泣き出したのだから。泣き止もうとしても、涙が次から次へとあふれてくる。

「真守、見て」

顔をあげると、鈴人が一輪の花を持っていた。

おもちゃではない、ナマの花だった。

「この花の色は赤ですが、この魔法のハンカチをかけると……」

どこから取り出したのか、鈴人はアイロンをかけた真っ白のハンカチを手にしていた。

それを花にかぶせた。

「ワン、ツー、スリー……なんと！ 花の色が白くなっています！」

ハンカチを取った花は、色が変わっていた。

昔、私に見せてくれた手品と同じものだった。

花が造花ではなくナマの花だったり、ハンカチが変わっていたり、ところどころ成長した点が見えるが、基本はあの頃と変わっていない。

「泣きやんだな」

ほっとしたように鈴人が笑った。

笑顔も言葉も、あのときと変わっていない。

今さら、気付く。

あのときから私の心は鈴人に奪われていたのだ。

鈴人のことしか考えられないなんて、まるで。

『いつも男の話ばかりで……』

『男のことしか考えてなくて……』

私はぎゅっとTシャツの胸を掴んだ。

あんなに嫌悪した存在と、自分が同じものだったなんて。

『真守はそんな人間になっちゃダメだよ』

分かっている。

母親のように。

佐々のように。

私は、なりたくない。

真っ直ぐに鈴人の目を見る。

鈴人が心配そうな顔をしている。

笑顔を浮かべて、私は口を開いた。

「『僕』と鈴人は友達だよ」

鈴人はきょとんとした顔をした。

それから、激しく頷いた。

僕は笑みを深めて、ありがとうと呟いた。

あの日から、『私』は『僕』になったのだ。

鈴人に告白された次の日、僕は鈴人から逃げていた。どんな顔をして鈴人に会って良いのか分からなかった。

朝、家の前で待っている鈴人に気付き、あわてて裏口から出た。

休み時間のたびに、鈴人が声をかけようとするので、七生のところへ逃げた。

教師に実験の片づけを頼まれたら、鈴人が一緒にやると言い出したので、片づけを全部押し付けた。

昼休みは七生を捕まえて、屋上まで来ていた。

「ふうん、そんなことがねえ」

話を聞いた七生はそう言って、紙パックのコーヒーに口をつけた。

僕はパサパサに乾いたサンドイッチをかじった。

「で、真守はどうしたいの？」

「僕は鈴人と友達でいたい」

「あらあら」

「鈴人とは友達でいたいんだよ」

「でも、鈴人はそう思っていないだろう」

「……」

小さく、頷く。

七生は、仕方ないわねえ、と曖昧に微笑んだ。

僕はサンドイッチを飲み込んで、呟いた。

「もう戻れないのかな」

元の関係に。

友達で、幼なじみで、平行線。

ネクタイをやってあげて、軽口を叩いて、毎日一緒に帰るだけ。

それ以上もそれ以下も存在しない。

五歳の頃から保っていた距離を、これからも続けていくことは不可能なのだろうか。

「鈴人が望めば、戻れるだろうけど」

言外に無理だと含まれる。

僕は紙パックのレモネードを味気なくすすった。

七生は僕の頭をあやすようになでた。

「お前も難儀な恋をしてるねえ」

叶わないことを望む恋。

それはお互い様だった。

「ま、鈴人が落ち着くまで、距離を取るのが得策かもね」

七生の言葉に、僕は頷いた。

「たった一人を避けるのはすごく体力がいるね。午前中だけですよ疲れたよ」

「誰かを好きになるのと、誰かを無視するのは同じことなんだってよ」

「誰の言葉？」

「誰かの言葉」

「ふうん」

誰かを好きになる。

誰かを無視する。

どちらも特定の誰かを意識するということ。

けれど。

好きなときは、楽しい。

避けるのはとてもつらい。

「全然違うよ」

すねたように呟く。

七生は曖昧に微笑んで、肩をすくめた。

ちょうど、午後の授業の予鈴が鳴った。

廊下から騒々しい足音がし、教室のドアが勢いよく開いた。

鈴人は教室を見渡して、がっくり肩を落とした。

教室には日誌を記入している七生がいるだけで、他は誰もいなかった。

「真守は？」

「先に帰ったよ」

そっけなく七生が答える。

鈴人はよろよろと七生の隣の席に座った。そこは真守の席だった。

「いつもだったら予備校がはじまるまで、ここにいるのに」

「何か用事でもあったんだろ」

「ああもうなんでだよ！」

ふてくされて、鈴人は机に突っ伏した。

七生は気にせず日誌を書き続ける。

ぼつりと鈴人がつぶやいた。

「小学校の終わりくらいだったんだよなあ」

「何が、」

「真守が『僕』って言い出したの」

七生は一瞬ペンを止めたが、またすぐに書き出した。

鈴人は顔を横に向けて、七生の書くペン先を恨めしそうに見つめた。

「ずっと何かの遊びだと思ってたんだ」

教室の中は七生のシャーペンの音しかしない。

窓の外から野球部のかけ声がかすかに聞こえてくる。

3時を知らせるチャイムが鳴った。

シャーペンの音が止んだ。

七生は日誌を閉じながら、口を開いた。

「お前、いつから『俺』っていうようになった？」

「あ？」

「以前は『僕』って言ってたんだろ？」

「あー……まあ……」

「いつから変えた？」

「小学校……5年か、6年のころかな……」

「どうして変えた」

矢継ぎ早に、七生が質問する。

唇を突き出しながら、鈴人は答えた。

「どうしてって……『僕』ってというのが恥ずかしくなった……からかな。お前だってそうだろ？」

」

七生は納得したように頷いて、立ち上がった。

鈴人もつられて体を起こす。

「七生、なんか知ってるの？」

「何も」

「うそつけ」

間髪入れない鈴人の返事に、七生はかすかに笑った。

七生は日誌を手に、鈴人を見下ろす。

「ただ、俺と真守は似た者同士だから、なんとなく分かるんだよ」

「似た者同士？」

七生は曖昧に笑って、教室を出て行こうとした。

その背に鈴人は、おい、と不機嫌な声をかけた。

振り返った七生は曖昧な笑みのまま、こう告げた。

「真守も『私』と言うのが恥ずかしいんだろうな」

鈴人はぱちぱちとまばたきをした。

七生は、頑張れ、と言い残して、教室を出て行った。

「なんだよ、それ」

難題を与えられて、放置された子供のような顔をして、鈴人は机に突っ伏した。

朝、僕は学校の裏門へ向かっていた。校門は鈴人が待ち伏せている可能性があった。

通常、裏門は防犯のため閉まっているが、よじ登れないことはない。

ケータイの時計を見ると、そろそろ予鈴が鳴る頃だった。足早に裏門に向かう。

そこの角を曲がれば裏門という角を曲がったところで、僕はぴたりと足をとめた。裏門に鈴人がいた。学校側から裏門に寄りかかって、こちらを見ている。予想外だったので、避ける間もなく目が合ってしまった。

どうしよう。

このままわざとらしく避けることは可能だが、正門のほうへ回っている時間がない。予鈴が鳴れば、正門は閉まってしまう。

僕が逡巡している際に、鈴人が口を開いた。

「もうすぐ予鈴鳴るよ」

寸分変わらず、ケータイが震えた。

予鈴五分前のアラームだ。

迷っている暇はなかった。僕は裏門をよじ登った。門の上から学校側に飛び降りようとして、鈴人が左手を出してきた。

つかまれということなのか。

またしても逡巡した僕に、鈴人が言った。

「『友達』だったら、こんなの気にしないだろ？」

背中を押されるように、僕は自分の右手を鈴人の左手に乗せていた。

そのまま鈴人を支えにして、門の上から飛び降りる。

ちょうど、予鈴が鳴った。

「ありがとう、鈴人」

「ん、」

何もなかったかのように立ち去りたかった。

が、鈴人が手を離してくれなかった。

さり気なく引っ張っても、がちり掴まれて、ふりほどけない。

「鈴人、教室行かないと……」

「真守、クイーンズパークって分かる？」

ぽつりと鈴人が呟いた。

僕は首を傾げて、鈴人の顔を見上げた。

「クイーンズスクエアの？」

「そう」

クイーンズスクエア横浜の一階にあるクイーンズパークには、何度か鈴人と鈴人の母親と僕の三人で行ったことがあった。

クイーンズパークでは、ときどき大道芸をやっている日があるのだ。大道芸と一口に言っても、パントマイムやアクロバット、ジャグリングなど多彩だ。その中にマジックもあった。プロのマジシャンのマジックが見たいと言う鈴人に引っ張られて、行ったのだった。

「あそこに今度の土日マジ会の先輩が出るんだけど」

マジ会とはマジック同好会のことだ。鈴人が所属している。大多数の部員は趣味が高じた程

度だったが、一人だけOBでプロのマジシャンになった人がいるという話を聞いたことはあった。鈴人はその人になついていたのは知っていた。

「俺、前座に出ることになった」

休日のクイーンズパークは大変な人出だ。大道芸のどれも始まるとすぐに人だかりが出来た。

あの場で鈴人がマジックをするとは。

すごいね、という言葉が口を衝いて出てきた。

「だろ？」

鈴人がパッと笑顔になった。

不意打ちだった。

心臓が大きく跳ねた。

「『友達』だったら、見に来てくれるよな」

断れなかった。

うなずくしかなかった。

ぎこちなく了承すると、鈴人はますます嬉しそうに笑みを深めた。

「あ、早く教室行かなきゃ。本鈴鳴っちゃう」

鈴人は僕の手を握ったまま、教室へ足を向けた。

僕はつんのめりながら、なんとか体勢を整えた。

「鈴人！ 手！ 離して！」

「いいじゃん！ ちっちゃい頃はよくこうしてたじゃん？」

「いつの話をしているのさ」

「いいじゃん！ 『友達』だったら普通じゃん？」

それはない、と突っ込もうとして、頭上から黄色い声が降ってきた。

つられて、上を見上げると、三階の窓から女生徒が数人、顔を出していた。

僕は反射的に鈴人の手を振り払っていた。

「鈴人くん、もうすぐ先生来るよ」

「分かってます。ありがとう、先輩」

愛想良く、鈴人は手を振って、答える。

きゃあ、とまた黄色い声が降ってきた。

女生徒の一人が、楽しそうに鈴人に言った。

「ねえ、土曜日にクイーンズパークに出るんでしょ？」

「はい。よくご存知ですね」

「だって、私たち鈴人くんの応援団だもん」

「お暇でしたら、見に来てください」

「行く行く！ 暇じゃなくても行く！」

「ありがとうございます」

きゃあ、と嬉しそうな悲鳴があがった。

鈴人は営業用のスマイルを振り撒きながら、その場を立ち去った。

僕もその背を追いかける。

実のところ、僕はあの三年の先輩たちが少々苦手だった。鈴人をアイドルか何かと混同していて、自分たちをファンクラブの親衛隊か何かだと思っているらしい。鈴人の傍にいる女子には目を光らせ、近付き過ぎると『警告』をするありさまだ。僕は鈴人に近過ぎる故に、そう言った直接的な被害は受けなかったが、同じクラスの女子は少なくとも一度は彼女たちに呼び出されて

いるようだ。

三階から注がれる視線が、とても刺々しい気がして、僕は逃げるようにして校舎に入った。

◆ COMPROMISE

土曜日はお天気に恵まれた。

昨日までは雨が降ったりやんだりしていたのに、今朝は雲一つない青空が広がっている。

朝の十時頃に鈴人から出演時刻を知らせるメールが届いた。

十二時と十五時と十七時の三回出演するらしい。

絶対に見に来てね、と念押しされた。

僕は帽子を目深にかぶって、桜木町の駅を出た。

週末のみなとみらいはカップルやら、家族連れやらでたいそうな人出だ。

ぼやぼやしていると、行きたい方向に行けない。

人波をすり抜けて、クイーンズパークへたどり着いた僕は、鈴人からのメールをもう一度確認した。

「パシフィコ横浜のほうへちょっと行ったところにある黒いバン……」

ご丁寧に鈴人からのメールには待機スペースの場所まで、明記してあった。

ぐるりと見渡すと、目立たないところに黒いバンが駐車していた。

近付くと、鈴人がバンの陰にしゃがみ込んでいるのが、見えた。

「鈴人」

声をかけると、鈴人がパッと顔を上げた。

笑顔で、傍に寄ってくる。

「真守！ 来てくれたんだ！」

今日の鈴人は黒いスーツに、白ワイシャツというマジシャンの定番の格好をしていた。この格好を見るのは、文化祭でのマジック同好会の発表以来だ。

ワイシャツにはきちんとアイロンがかけられ、襟までピシッとしている。が、ネクタイは首にかけてあるだけだった。

まったく、と呟くと、僕は鈴人のネクタイに手をかけた。

「まったくハレの舞台が台無しじゃないか」

鈴人が嬉しそうに笑った。

「だって俺のネクタイは真守がやってくれんだもん」

当然といった風に鈴人が言う。

ああ、そうだった。この距離だ。ようやく思い出した。

僕と鈴人は幼なじみで。

僕は鈴人に振り回されてばかりで。

一週間前のあの告白の衝撃で、ずっとこの距離を忘れていた。

この距離が一番心地よい。

ネクタイを締めて、僕は結び目をぽんと叩いた。

「できたよ」

「サンキュー」

大切なものに触れるように、鈴人はネクタイを優しく撫でた。

その顔にほっとしたような、悲しそうな、複雑な表情が横切った。

けれど、すぐに笑顔に戻り、お礼にこれをあげるね、と手首をひるがえした。

「はい。今日の花はいつもより大きいよ」

鈴人の手に、カーネーションの花が出現した。

確かに大きさで言えば、いつも学校でマジックをする時に使っている花よりは大きい。

だが、茎は短く、持つのに苦労する。

小さく笑いながら、僕は花を受け取った。

「これ、今日の前座で使うものじゃないの」

「うん。実はそう」

「こんなところで使っちゃダメじゃないか」

「いいんだよ。俺が真守にあげたいんだから」

くらりとするほど、耳触りの良いセリフ。

こんなセリフを吐かれたら、多くの女性は鈴人に心惹かれるだろう。僕だって例外ではない。

このまま心惹かれるままに鈴人のことだけを考えていられたら、幸せなのだろう。

そんな考えが頭をよぎると、もう一人の僕が反対をする。

母親のようにはなるな、と。

大声で叫び、僕と鈴人の間に距離を作るよう指示する。

僕の中にある異なる二人は、いつだってせめぎあっている。

だから、この距離が一番良いのだ。

『友達』であり、『幼なじみ』であるこの距離が、僕の中の二人が唯一共存できる距離なのだ

。

ケータイを取り出して、時間を確かめると、十一時五十分だった。

そろそろ鈴人の出演時間だ。

「僕はちゃんと見てるから。頑張りなよ」

「ん」

僕はクイーンズパークへ戻り、適当に観覧できる場所を探して、腰を下ろした。

ほどなくして、鈴人が出てくる。

日差しが照りつける中、突然現れたスーツ姿の鈴人に、通行人は興味津津で足をとめる。

すぐに鈴人を囲むように人垣ができた。

鈴人は人垣の中心に立つと、わざとハンカチを落とした。

最前列の子供が拾って、渡してくれる。

お礼を言うと、鈴人は手首をひるがえして、花を出した。

人垣が、わっと沸いた。

観客がとても楽しそうに鈴人のマジックを見ている。

まるで僕は自分のことのように嬉しくなった。

きっとこの前座は成功するだろう。

遠くから鈴人のマジックを見ながら、僕は知らず微笑んでいた。

◆ MISTAKE

夕方の五時過ぎ。

鈴人は最後の前座を終えた。たくさんの観客から拍手をもらい、退場した。

前座はおおむね成功した。観客の受けもばっちりだったし、目立ったミスもなかった。

先輩マジシャンが交替して、人垣の輪の中に立った。

急に僕は眠気を覚えて、あくびをした。鈴人の出番が終わり、緊張が解けたのだろうか。自分は出演していないのに緊張するとは、なんだかおかしい話だ。

このあと鈴人は打ち上げがあるだろうから、僕は先に帰った方が良さそう。

メールで帰る旨を伝えておこうとケータイを開いたところで、誰かに声をかけられた。

「馬場さん」

見たことのある少女が傍に立っていた。

ただ、見たことがあるだけで、名前までは思い出せなかった。

確か、同じクラスの女子だったように思う。

「えっと、」

「私、愛川恵美。同じクラスなんだけど、分かる？」

「ああ、今、鈴人の前の席に座ってる人？」

「そうそう。良かった。今日私ひとりで来たから、知り合いがいなくて、心細かったんだあ」

ふわりと少女が微笑んだ。

お嬢様という言葉が似合う子だ。

真っ直ぐな黒い髪を腰まで伸ばしている。化粧っけはないが、目鼻立ちが整っているの、人の目を引く。コットン素材のふんわりとしたワンピースから、白い手足がのぞいている。

しゃべり方もおだやかで、好感がもてた。

「これから鈴人くんに会っていくの？」

「いや、鈴人はこのあと打ち上げとかあるだろうから、僕は帰るよ」

「そっかあ」

どうしようかな、と呟いて、少女は口元に手をあてた。

綺麗に整った爪に、薄いピンクのマニキュアが丁寧に塗られていた。

女の子だなあ、と僕は感心した。

同年代の女子というと、鈴人に寄ってくるガツガツした印象の女子しかいないものだと思っていた。聞き取れないくらい早く話し、性格はとても活発で、メイクに熱心で、髪はブリーチやパーマで傷んでいる、そんなアクティブの代名詞のような存在。

こんな大人しくて、清楚な子もまだ存在していたのかと驚いた。

「馬場さんと鈴人くんって付き合ってるの？」

「え？」

予想していなかった質問に、不意をつかれた。

目の前の少女は綺麗に微笑んで、付き合ってるの？ とくり返した。

その質問には悪意も醜さも感じなかった。

同じような質問を、他の女子に言われたら、きっと嫌悪感で反発していただろう。

けれど、彼女の言葉には爽やかさを感じた。

だから、素直に、否、と答えた。

「付き合っていないよ」

「本当？」

パッと少女が笑顔になった。

花が綻ぶような笑顔に、わずかばかり見惚れた。

「じゃあ、馬場さんと鈴人くんは『友達』なんだね」

「うん」

「良かった」

少女はピンク色の小さな紙袋を胸元に寄せた。

「差し入れを持ってきたんだけど、鈴人くんに直接渡したいの。どうしたらいいかな」

ああ、なるほど。

合点がいった。

彼女の言葉から、悪意や醜さを感じなかったのは、このためか。

他の女子が僕に対して向けるのは敵意や嫉妬。

彼女が僕に対して向けるのは気遣いや、遠慮。

彼女の中では、どんなに鈴人のファンだなんだと言っても、鈴人の連れ合いを飛び越えて、直接に物を渡すのは気が引けたのだろう。

そのための確認だったのだ。

彼女の気立ての良さに、感心した。

そして、自然と彼女の役に立ちたいと思うようになった。

「それだったら、鈴人にここに来るようにメールしとくよ。愛川さんはここで待っていれば良い」

「本当？」

「うん。場所はここでいいんだよね？」

「うん。ありがとう！」

満面の笑みを浮かべる彼女を見て、本当に鈴人のことが好きなんだなあ、と感心した。

さっきから彼女に感心してばかりだ。

僕は鈴人に、これから帰る旨と、鈴人に待ち人がいるのでクイーンズパークへ来る旨をメールした。

「今メールしたから、待ってれば鈴人が来るはずだよ」

「ありがとう、馬場さん」

「じゃあ、僕は帰るから」

「うん。また学校でね」

そのやり取りが新鮮で、僕はハッとした。

女子とこんな穏やかに言葉を交わしたのは、久しぶりだった。

僕はとても爽やかな気分で、帰路についた。

*

その夜、鈴人から携帯電話に電話があった。

なぜか鈴人はとても不機嫌だった。

「なんで、先に帰ったの、」

「鈴人はあのあと打ち上げとかあったんでしょ」

「そうじゃなくて、なんであの子だけ残してひとりで帰ったのさ」

あの子、と言われて、愛川さんの顔が頭をよぎった。

確かに愛川さんを一人で残していったが、別に子供じゃないのだから、問題はないはずだ。
「愛川さんが鈴人に直接渡したいものがあるって言うからさ。僕がいても邪魔だろ」
「真守はそれで良いんだ、」
「どういう意味？」
「俺が知らない女と二人っきりで会って、気にしないんだ、」
あてこするような言い方が、癪に障った。
何をそんなに怒っているのだろうか。
理由も分からないまま、責められても答えようがない。
ここで感情のままに反発しても、良い結果は生まれたことがない。
小さく息をついて、口を開いた。
「僕たちは『友達』だろう。お互いが異性と二人っきりで会ったからって、いちいち気にする間柄じゃないじゃないか。実際、僕は七生とよく一緒にいるけど、鈴人は気にしていないよね」
電話越しにモゴモゴと何か言われた。
電波が悪く、聞き取れなかった。
「え？ 何？」
「もういいって言ったんだ！ おやすみ！」
一方的に電話が切られた。
お手上げだ。
これではヒントもなしに大学受験問題を解けと言われているようなものだ。
僕は釈然としない思いを抱えつつ、携帯電話を充電器に戻した。
机に向き直り、開きっ放しだった問題集に目を落とす。
数学のベクトルの問題を解いているうちに、先ほどの電話のことは忘れてしまった。

月曜日の朝、教室に入った僕は、いつもと違う感覚に襲われた。

何かがいつもと違った。

七生がいないのは、いつもと同じだ。

八時半から朝会が始まるのは、いつもと同じだ。

だらだらと全校生徒が校庭に並ぶのも、いつもと同じだ。

校長の長々とした話を聞きながら、僕はずっと先週の月曜日と今日のどこが違うか考えていた

。朝会が終わり、教室へ戻る途中で、はたと気付いた。

今日は鈴人がネクタイを持って、やって来ない。

ぐるりと辺りを見渡して、鈴人を探す。すぐに見つかった。ネクタイは乱雑な形だが、結ばれていた。

そして、鈴人の隣には、愛川さんがいた。

「え、」

驚き過ぎて、声をかけるタイミングを見失った。

肩を叩かれ、弾かれたように振り返る。

そこには七生がいた。

「おはよう、真守」

「おはよう……」

「なにあれ。鈴人どうしたの」

言葉が出て来ず、僕はただ首を横に振った。

七生は、ふうん、と呟くと、あの二人を観察するようにじっと見つめた。

そして、僕の方に向き直ると、笑顔になって、僕の肩に手を回した。

「とりあえず、教室に戻ろう」

そのまま、有無を言わず引っ張っていかれた。

大体の状況は教室で座っていたら、耳に入ってきた。

愛川さんが告白をして。

鈴人が了承して。

二人は付き合っている。

他にも尾ひれや背びれがついた噂まがいの話もあったが、大筋は変わらなかった。

なんだか拍子抜けした。

鈴人に彼女が出来たら、もっと衝撃を受けるかと思ったが、それほどでもなかった。すぐに受け容れることができた。

愛川さんがとても感じの良い子だったから良かったのかも知れない。

他の女子だったら、嫌悪感を覚えて、鈴人のことすら嫌いになっていたかも知れない。

あの二人ならお似合いだ。

幸せになって欲しいと願う。

昼休みに僕は七生を連れて、屋上へ行った。

屋上のコンクリートの床にあおむけになり、青い空を見上げる。

「大丈夫？」

乾いた七生の声に、うん、と返す。

「ショックとかそういうのは全然。すごく楽になった」

「曖昧な関係をこれ以上続けていっても無駄、か」

「自分自身、意識してなかっただけで、分かっていたのかもね」

青い空に白い雲が浮かんでいる。

ゆっくりとだが、白い雲は風に流され、ふたつに分裂していく。

穏やかな風が吹いていった。

「俺からも残念なお知らせ」

七生がおもむろに告げた。

「兄さん夫婦に子供ができた」

まばたき一回。

僕は目だけを動かして、七生を見た。

逆光で七生の表情はよく分からなかったが、曖昧な笑みを浮かべているのだろうと思った。

いつもと変わらない微笑み。

つまり、七生の中ではもう決着がついてるということだ。

そう、とだけ答えて、僕はまた空へ目を戻した。

七生のことを思うと、おめでとう、とは言えなかった。

僕の恋も、七生の恋も、静かに終わっていったのだ。

叶わぬ恋だと初めから分かっていた。

ずっとこのまま曖昧な関係を続けていけたらと願っていた。

そんな延命にも似た思いが、ようやく終わりを告げた。

「ねえ、真守、俺たち付き合っちゃおうか」

意外な言葉が七生から発せられた。

あまりのリアリティのなさに、反応が遅れた。

「僕と、七生が？」

「そう。ひとり者同士」

とても魅力的な話だった。

けれど、即答が出来なかった。

ぼんやりと考えていたら、すぐ近くに七生の顔があった。

唇と唇が触れる。

七生の顔が離れてから、ようやくキスをしたことに気付いた。

僕は小さく笑った。

「やめておく」

「そう」

当然といったふうに七生は頷いた。

驚いた様子は微塵もなかった。

七生も僕が断ると分かっていたのだ。

キスをしてみて、理解した。

七生の僕への感情はペットへの愛情と同じで。

僕の七生への感情も友達以上ではなかった。

「あーあ。幸せになりたいなあ」

「そうだねえ」

僕は二人で仰向けになって、夏へと変わりゆく青い空を見上げていた。

◆ MOTHER

なつかしい夢を見た。

母親の夢だった。

五歳までしか母親と一緒にいなかった僕にとって、その夢は圭兄の話とあの写真をブレンドさせただけのただの妄想なのかも知れない。

けれど、小さい頃から同じ夢をくり返し見た。

楽しそうに電話で誰かと話す母。

楽しそうに鏡台に向かい、化粧をする母。

楽しそうに服を選び、香水をつける母。

地味な姿の母親が鮮やかに色づいていく様は、まるで魔法のようだった。

そして、母親は必ず僕を抱きしめて、「行ってきます」と言った。

母親に愛されていなかったとは思えなかった。

母は僕を愛していた。

けれど、僕を愛するよりも、母親は誰かに愛されることを望んでいた。

それが悪いことだと僕は断ずることが出来なかった。

その夢から目覚めたとき、僕はなぜか涙を流していた。

◆ BROTHER2

リビングに行くと、圭兄は出勤の準備をしていた。

スラックスにワイシャツ姿で、歩き回っている。

「ああ、真守。おはよう。俺の腕時計知らないか」

「昨日、お皿洗うからって外して、食器棚に置いた気がするけど」

「そうだ。そうだった」

圭兄は食器棚から腕時計を探し当て、左手首に嵌めながら、出しっ放しだった牛乳を冷蔵庫にしまった。

忙しい圭兄に声をかける。

「ねえ、ママってどんな人だった？」

ぴたりと圭兄は動きをとめた。

圭兄は訝しげに僕を見た。

僕は薄く笑んで、くり返した。

「ねえ、ママってどんな人だった？」

一度、圭兄は迷ったように視線をさまよわせた。

が、すぐに目を伏せて、答えた。

「いつも男の話ばかりで……男のことしか考えてなくて……子供のことは目に入っていない……
そんな人……」

変わらない答え。

圭兄はずっと同じ気持ちを母親に抱き続けているんだ。

「ママのこと、好き？」

「……分からない」

圭兄の声が一瞬揺らいだ。

嫌いだ、と答えようとして、言い切れなかった何かがあったのだろう。

きっと圭兄もママから愛された記憶が、あるのだと思う。

「僕はママのようにはならないから」

安心して、と言外に込めた。

僕は母親と同じ血が流れている『女』だから、同じ道を歩む可能性は大きい。

だからこそ、断言しておきたかった。

圭兄を悲しませることはしない。

圭兄の心をざわめかせることはしない。

その誓いがここまで育ててもらった、圭兄への恩返しになる。

そう、思った。

けれど。

圭兄が微笑んで、僕の頭に手を乗せた。

「大丈夫だよ。真守は僕が育てたんだから」

あの人のようにはならないよ。

運命を宣告するように、圭兄は言い切った。

静かな衝撃が、僕を襲った。

咄嗟に言葉が出てこなかった。

圭兄は腕時計を見ると、あわてて玄関へ走っていった。
行ってきますという声とともに、ドアが閉まる音がした。
僕はしばらくの間、リビングに立ち尽くしていた。

◆ DECIDE

学校に着いた僕は、鈴人を探した。

鈴人は遅刻ギリギリで教室に入ってきたので、声をかけられなかった。

休み時間も移動教室の時間も声をかけようとしたが、いつも鈴人の隣には愛川さんがいて、叶わなかった。

「いつもと逆だね」

昼休みに屋上でサンドイッチ片手に、七生が言った。

その顔はとても楽しそうだった。

「逆？」

「鈴人が追いかけて、真守が逃げる、っていうのがいつものパターンだったじゃん」
なるほど。

実にうまく言い当てている。

僕は黙ったまま、サンドイッチを齧った。

「それにしてもどういう心境の変化？」

「鈴人と直接会って話がしたいんだ」

「謝りたいってこと？」

「ちょっと……違うかもしれない……」

理由も言わずに逃げ続けていた。

鈴人の言葉を正面から受け止めていなかった。

僕は『友達』という安易な言葉に逃げただけだったんだ。

「鈴人に僕の気持ちを伝えて、ありがとうって言って、それから愛川さんとのことを祝福したいんだ」

「そっか」

頑張れ、と七生が笑った。

僕は力強く頷いた。

*

とうとう放課後まで、鈴人に話しかけるチャンスが訪れなかった。

今日の時間割は八時間目までであったので、授業が終わると真っ先に予備校へ向かわなければいけなかった。

予備校が終わったあとに、アルバイト先へ行ってみようと考えたが、今日という日に限って、予備校講師の弁舌が良く、講義が延長した。

講義が終わってから、アルバイト先へ駆けつけたが、すでに鈴人は退勤したあとだった。

何か大きな力によって、鈴人に会えなくされているような気がしてきた。

だが、最後のチャンスは残っていた。

僕は鈴人の家へ足を向けた。

今日でなくてはならない理由はなかった。明日でも、明後日でも、学校にいる間にチャンスを待てばいいはずだった。今日はもう学校と予備校のコンボで疲れ切っていたし、体はこのまま家へ帰りたいたいと主張していた。

でも、最後まで賭けてみたいと思う自分もいた。鈴人に対して、手を抜きたくないと思固地に叫んでいる僕がいた。

そのもう一人の僕の情熱に突き動かされるように、僕は鈴人の家までやってきた。

鈴人の家は二階建ての一軒家だ。二階の道路に面した部屋が鈴人の部屋だった。

道路から鈴人の部屋を見上げてみるが、明かりはついていなかった。

玄関先にも明かりはついておらず、人の気配がしない。

アルバイトの終わった鈴人を追いかけてきたはずなのに、どこかで追い越してしまったのだろうか。

このまま鈴人の帰りを待つか、来た道を引き返して鈴人を探るか迷っていたら、男女の話し声が近づいてきた。

男の声は鈴人だ。

僕は反射的に電柱の陰に隠れていた。

女の声も聞き覚えがあった。愛川さんだ。

鈴人のアルバイトが終わったあと、待ち合わせでもしていたのだろうか。

これでは鈴人に話しかけられない。

今日はもうあきらめるか、と落胆していたら、不意に別の男の声がした。

愛川さんが驚いたように「達ちゃん」と言ったのが、聞こえた。

そろそろと電柱の陰から顔を出すと、鈴人と愛川さんの前に少年が立っていた。

少年は学生服を着ていた。その学生服に見覚えがあった。隣の男子高のものだ。

「誰？」

鈴人のセリフは愛川さんと少年の両方に向けられたものだった。

少年は楽しそうに「恵美の彼氏」と言った。

愛川さんは「『元』でしょ」と否定した。

「同じ中学だったの。卒業するときに別れたんだけど」

「それは恵美が一方向的に別れるって言うだけで、俺は認めてないぜ」

その会話だけで、なんとなく状況が分かった。

愛川さんと少年は中学時代に付き合っていたが、卒業と同時に別れた。

が、少年はそれを了承せず、ずっと愛川さんにつきまとっていた、と。

中学卒業なんて一年以上前の話なのにしつこい男だな、と僕は思った。

「人の女に手を出して、どうするつもりだよ」

なんて言いがかりだ。

鈴人が何と言って返すのか、見ていたら、不意に鈴人は愛川さんを少年の方へ押しやった。

「え？」

「返すよ」

物を交換するかのような軽い口調で、鈴人は言った。

愛川さんはひどく驚いた顔をしている。少年もこちら側からは見えないが、驚いているのだろう。

ただひとり、鈴人だけが無表情だった。

「めんどくさい」

ぽつりと言い捨てると、鈴人は家に入って行こうとした。

が、寸でのところで少年が鈴人の腕を掴み、壁に押し付けた。

「なにふざけたことぬかしてんだよ、お前！」

「何？ 彼女が返ってきて嬉しくないの？」

「うるさい！ 恵美に謝れ！」

「めんどくさっ」

その瞬間、殴打音が響いた。

鈴人の体が道路に倒れる。

愛川さんが短い悲鳴を上げた。

少年は鈴人の体の上に馬乗りになると、執拗に揺さぶった。

「謝れよ！ 恵美に謝れよ！」

鈴人は無表情のまま、少年のなすがままになっていた。

何の感情も見せない鈴人に苛立ったかのように、少年が鈴人の手を掴んだ。

「お前、マジシャンなんだって？」

途端、鈴人の顔に緊張が走った。

「指が折れたらどうなるんだろうなあ」

僕は駆けだしていた。

無我夢中で少年に体当たりする。

少年は突然現れた僕に対応できず、道路に転倒した。

そのまま、僕は鈴人の手を掴んで、家の裏手に回り込んだ。

勝手口の鍵は、植木鉢の下に置いてあるのは知っていた。

手早く勝手口を開けると、鈴人を家の中に押し込んで、僕も中へ入った。

鍵をかける。

しばらく、少年の怒鳴り声が聞こえていたが、少しすると聞こえなくなった。少年は去ったようだ。

僕は大きくため息をついた。

「……イテテ……」

暗闇の中で鈴人のうめき声がした。

僕はあわてて辺りを見渡した。

目を凝らすと、台所の床で鈴人がうずくまっていた。

這い寄って、鈴人の手を掴む。

「指！ 手！ 大丈夫？」

「あ……」

「動く？」

必死に見つめると、鈴人はゆっくりと手を動かした。

鈴人はグーパーをくり返して、頷いた。

「ん。大丈夫そう」

「良かったあ」

体の力が抜けた。

鈴人がマジックできなくなるなんて、考えたくもなかった。

取っ組み合いのけんかに飛び出すなんて我ながら無謀だった。けれど、鈴人の指だけはどうしても守りたかった。

「真守……何しに来たの……」

不意に問われて、僕は弾かれたように顔をあげた。

ひどく近い距離に鈴人の顔がある。

冷たい目が僕を見据えていた。

鈴人がこんな拒絶の色を露わにして、僕を見るなんて初めてだった。

いつだって鈴人はやさしくてあたたかかった。

僕はそんな鈴人の優しさに甘えて、一方的に傷付けたのだ。

泣きそうだった。でも、今は泣いてはいけないと涙をこらえた。

「謝り……たくて……」

のどがひきつる。

カラッカラの口から絞り出すように言葉を発した。

「何を、」

「鈴人を傷付けたこと」

鈴人が嗤った。

見たこともないあざけりの笑みだった。

「何それ。俺が惜しくなったの？」

「違う」

「他人に取られて、くやしくなったの？」

「違う！」

完璧に否定がしたかった。

鈴人の誤解を解きたかった。

でも、言葉が出てこなかった。

どうすれば鈴人の怒りがおさまるだろう。

どうすれば鈴人に僕の言葉が届くのだろう。

頭の中では必死に考えているのに、言葉が見つからなかった。

パニックになっている頭の片隅で、気付く。

鈴人に僕の意志が伝わらないなんて、初めてのことだ。

いつだって鈴人は僕の数少ない言葉を読んで、心を読んで、最大限に反応してくれたから。

僕は自分の意思を鈴人に伝える術を考えないで過ごしてきた。

これは罰だ。

鈴人の優しさに甘えて、ズルばかりしていた僕への罰だ。

こらえていた涙があふれてきた。

しゃくりあげながら、僕は必死に伝えた。

「僕は……愛川さんと……鈴人を祝福したくて……おめでとうって言いたくて……」

鈴人の目が驚きに見開かれた。

「ごめんなさい……今までごめんなさい……」

涙があふれて、目が開けていられなくなった。

きっと鈴人は呆れている。

当然だ。目の前で突然泣き出して、こんな八つ当たりのようにわめき始めたのだから。

こんな支離滅裂な言葉では何も伝わらないと、頭では分かっているけど止まらなかった。

「鈴人は悪くないから……愛川さんと仲良く……」

いきなり強い力で引っ張られた。

何かやわらかいものに倒れこむ。

体を締め付ける力強い腕の感覚で、鈴人に抱きしめられていると気付いた。

ぽつりと鈴人が呟いた。

「……イヤだ」

「鈴人……苦しっ……」

「イヤだ。真守以外はイヤだ。真守じゃないなら要らない」

噛みつくようなキスをされる。

すごい勢いで唇を押し付けられ、息がままならない。

こぶしで鈴人の胸を叩くが、キスは弱まらなかった。

次第に、脳みその芯が溶けていく感じがした。

緊張していた体がゆるゆると溶けていく。

鈴人の胸に崩れ落ちるように体を預けた。

ゆっくりと余韻を舐めとるようなキスのあと、鈴人の顔が少しだけ離れた。

「真守、俺のこと好き？」

返事はすぐに見つかった。

さっきまではあんなに言葉を探していたのに。

今、言いたい言葉は簡単に見つかった。

だから、すぐに口にした。

「うん。大好き」

鈴人の目が笑んだ。

あたたかい、やさしい目だ。

強く抱きしめられる。

今度は僕が鈴人の首に腕を回して、深い深いキスをした。

翌朝、僕らは一緒に登校した。

しまりのない笑顔で、幸せオーラ全開の鈴人を見るだけで、たいていの人には状況を悟った。僕はというと鈴人の応援団を自称するお姉さま方から呼び出しに備えて、待ち構えていたのだが、昼休みまで何事も起こらなかった。拍子抜けした。

昼休みに七生を屋上へ引っ張って行き、経過を報告した。

七生は微笑んで「おめでとう」と言ってくれた。

「なんか真守、雰囲気が変わった」

「何を言っているんだい」

「なんかやわらかくなった。女らしくなった」

「そうかなあ」

僕が複雑な顔をしていると、七生はやさしく頭を撫でてくれた。

確かに、肩の荷は下りたような気がする。

今まで自分を否定し続けていた。

今はあるがままの自分を受け容れている。

清々しい気持ちでいっぱいだ。

「真守、髪の毛、伸ばしたら？」

僕の頭を撫でながら、七生が言った。

「黒くてきれいな髪をしてるから、きっとロングも似合うよ」

「そうかな」

今まで敢えて女らしい恰好を避けてきたが、嫌いではない。

挑戦してみてもいいかもしれない。

「そうだね。考えておくよ」

僕の返事に、七生が嬉しそうに頷いた。

と、突然、屋上のドアが開いた。

「真守！ ここにいた！」

振り返ると、鈴人がネクタイを手にして、立っている。

「五時間目のロングホームルーム、全校集会だって！ ネクタイやって！」

僕と七生は同時に吹き出した。

待ち切れずにそわそわしている鈴人からネクタイを受け取り、彼の襟に巻きつける。

この幼なじみのネクタイを結ぶのは、これからも僕の役目になるようだ。